

## 並存

その生を救う道は、ただひとつだった  
しかも  
それを選ぶことは不可能に思われた

もし歩き続けなければならないのなら  
俯きながら歩くだろう  
それほどに生は重かったけれど

酒を片手の実りない夜々に  
聞こえなくなった耳と  
見えなくなった眼を更に麻痺させる

ああ、これこそが自虐というものだ  
この下らなさに満足していながらポーズのみを装う  
これこそが自虐というものだ

逃亡者の生活を、僕は棄てたのか  
それとも、今この時こそが  
逃亡者の生活なのか

次元を超えることなど出来はしない  
次元を超えた比較など出来はしない  
故に並存は不可避である

物理や数学には<sup>カオス</sup>混沌はない

それと同様に  
今の僕にも混沌はないのだ

それは、つまり  
次元が段階ではないからなのだ  
僕が統一を求めているという証なのだ

それにすぎないのだ  
つまり  
それこそが僕の生を救う道なのだ

則ちそれは逃亡ではないか、と君は言うだろう  
しかし、可能性を閉ざすことが逃亡なのか  
全てを歩むことを君は僕に求めるのか

君の言う通りだ、たとえ  
それが僕の生を救うただひとつの道だとしても  
それを選ぶことなど不可能なのだ

平行線が交わることができないのは  
ある定められた公理のもとでのみであり、則ち  
ある前提に基づいた空間の中でのことにすぎない

鏡の中の鏡像の如く  
僕自身が並存しているとしたならば  
僕の生を救うことはできないのだ

なぜなら  
それを選んだが最後  
無限大に連なる僕は死し  
唯一、この空間  
則ち人々が‘世界’と呼ぶところに存在する僕だけが  
閉ざされた空間の中  
狭苦しく喘ぐ僕だけが生きることとなるからなのだ

(1991.6.1)